




メソポタミア考古学教育研究所 ニューズレター

2号

2020年5月

目次

報告1	イラク人研究者招聘事業 (2019年4月10日～23日)	2
	国際シンポジウム (4月13日)	4
	各種施設見学等 (4月15～22日)	12
報告2	第2回通常総会・特別講演会・学術交流会 (7月20日)	16
報告3	土器づくり体験講座 (12月21日/2020年2月15日)	22
	新理事ごあいさつ	24



*JAPANESE-IRAQI INSTITUTE FOR
ARCHAEOLOGICAL EDUCATION OF MESOPOTAMIA*

報告 1

イラク人研究者招聘事業

都市、文字、貨幣。いずれもメソポタミアで発明された人類の叡知の結晶です。メソポタミア文明は、現代社会のルーツとしてかけがえない遺産を数多くもたらしていることは言うまでもありません。しかし残念ながら、この文明発祥地が現在のイラク共和国にあるということは、日本ではあまり正確に認知されていません。ここに歴史教育の問題点の一つが浮き彫りになっています。古代を振り返ること自体、現代を生き抜くわれわれには利益をもたらさない（ように見える）という極論がこうした課題を見えにくくしている側面もあります。悲しいかな、これが今の日本の実状です。

現在、メソポタミア文明の所在地であるイラクはどうなっているのでしょうか。イラク全体はまだ不安定な状況であることに変わりはありませんが、世界遺産の立地する南イラクは、以前よりも治安が回復しつつあります。軍事基地の近くにあるゆえに攻撃対象となりつつも奇跡的に残っているウル、自衛隊が設置したフェンスと地元民の理解によって護られてきたウルク、たどり着くことさえ難しくて忘れ去られつつあるエリドゥ。これらはすべて、2016年にユネスコ世界遺産に登録されたメソポタミア文明の遺跡です。

今、われわれにできることは、まずは国内での地道な啓蒙活動です。とくに、日本の若者たちに人類史の根幹をなしているメソポタミア文明について適切に教えること、それを知ることによってどんな意味があるのかを信念をもって伝えることです。そのためにはどの方法が最善か。捻り出した答えが自立組織の構築であり、2018年11月にNPO法人（JIAEM）を成立するにいたりしました。

JIAEMは、メソポタミア文明遺産を活用し

て、国内外における教育普及活動を目指しています。国内での啓蒙とともに、遺産の価値を十分に教育されていないイラクの学生に日本の専門家が講義することも目的にしています。その布石づくりとして、現地研究者の招聘などを継続しながら国際文化交流に貢献していくつもりです。今回のイラク人研究者招聘事業が嚆矢となります。国際シンポジウムを開催して、現地の学生と教員それぞれの目線で、歴史教育への要望について耳を傾ける機会をつくることにしました。

たしかに、これから進もうとしている道はおぼろげです。しかし、今何もしなければ、遺産が無理解や無関心により、我々の記憶からも消えかねません。遺産は誰の専有物でもないだけでなく、放置されるべきでもありません。メソポタミア文明遺産を教育の場面で活用しながら、未来の人材育成に向けた試行錯誤そのものが、日本の国際社会への貢献につながると信じています。

